



松のゑり





司日ハ百代のと家ヲ一ツケリ
了ノ事モ又旅人也毎のどよ生旅
をうへくの口とて老をむ
うへ地ハカク旅して旅を撫む
老人も多く旅して死なむか
るもいつれのおまらるる世の風
はくうりれて漂々のさみや
海濱くささくまの状にとの

破屋くづ蟻の古葉をささくして
やもすればそらもよき秋風のそらより
白川の淵こころこころから神の物こ
けうてこころこころハせぬ祖林のまの
こころあひしてあまのこころいつをうか
引の破をとりけりまの結をうけてま
よきすめりけりお終の月先つこ
うりてはらまゆハ人こ終り松風

別語考く終り

そよ方戸も住替代そよのま
面ハ向を、各の程こころおまはせも
まの七口切やひくえ懸くこころ月ハ
を切くこころえふまをたかま押くこ
不二の事無くまこころ上野公年の
ふの指又いつをこころつらこころこころ
まこころ終りこころまこころつらこころこころ

まゝして送るゝゆゑと云ふも亦
と云ふれどお途なふりておみ
物よりさしりて幻のちまこ
龍宮の御をこく

い春やもつ晴し美の貝洞
もよもよのゆくし行遣ふ
アチャコノ人こハカチノ
とほけのまゆらとハカチノ

ことし元禄ニヤセマ奥羽も
のり締りうりうりさうり
共こしら髪の花をいふ
年し物もいふいふかた
あせしてゆくと定ふと
と竹其日御早加と云ふ
きとらさうりうり疲骨の
うらみおとらさうり

とと出えはるを糸子つゝゑの
流きやして雨具を筆のせらふ
いふらさりて帰るとさういふ
こころもあつたては流のせ
あつたふりあふれ

家のハ崎より宿す同行雲の白
神ハ木のむらや姫の神とて
富土一姓也無戸室よ入て焼のよ

ちうらのみ申し火と出見のみと
せむらひより室のハ崎より入
特と流のわらへりもこの流也將
このと流より室と林より縁記
の首せよ傳より

此日日光山の林より流の
云々をわらへりも伝より
あつたを首とすらるる人

尸符中一書のそのの指もあぬて
位とつとといふから仏の濁世を聖者
示現してうら業門の乞食の礼
くまきの人をききすけりやうやと
はくしーのなすまうしよとてめて
みるくよ唯せ智すゑあうして正
出編圖の者也剛毅未訥の仁上
とくこをらふと丸薬の法信を

きりあし

卯月朔日御山へ詣りすは昔
此山を二荒山と書しとて海
大師一圓基の時りえんまのみよ
は歳末の事とほりりやうやと此
清光一夫くくやうく恩沢の荒
しあわれに氏末の極福ちち
は怪多くし、善とほりあふ

何れもきつてしるべき事なればなり

王教のよき處よりしるべき事なればなり

白

利捨てて王教のよき處よりしるべき事なればなり

雲霞のよき處よりしるべき事なればなり

芭蕉の下草よりしるべき事なればなり

薪火のよき處よりしるべき事なればなり

ねしよ家傳の恥共しるべき事なればなり

收し息ハ羈旅の難をりしるべき事なればなり

旅之曉の難をりしるべき事なればなり

まじし無五を改りて宗悟とす

仍てまじし無五を改りて宗悟とす

宗方何れしるべき事なればなり

其餘下らざるを改りて宗悟とす

頂より花流ししるべき事なればなり

雲霞のよき處よりしるべき事なればなり

ひろめ入て滝の裏よりこれに
らみりの籠とト付く付る也

将阿ハ流く流るや夏の後
形頃のまわれととあゝ知人あは
きより船と流くしめてきんを
ゆえとすくく一村をんんりて
かり雨降日さるに農夫の家
よ一敷をりて明れハ又路中

まのりこし野的力らあ
里州あまこしるけいこれハ野
とこしむこすくはねま
いこすくわいれも此路ハ縦横
よわわわらうあくま務人の
よこあこしあやこしれハ
かこすく所ハこしこし
こしあらこま者あらこ

はとさしこしと行ハ小娘と
くまをかきねとさづきれぬくもの
やこしうりたれん

うはねとハ八き極子のふき
おて人里よむれかあしんを
つりしおちかきとさきしぬ

黒羽の舞代津坊ちびくらのまよ
まろいんさむらぬあし一のぼひ

田ノ新ノ流つくり共舟相おあると
まろ朝夕ノ勢とさし自のまろ
とけいして教一屈のまろしすね
うりしおちかきとさきしぬ
よ遠運して大連おの位をこえし
那須の隠原をちかきし玉藻のまよ
古墳をとよろれよの八幡宮よ信
よ市麻の的を射しおちかきしぬ

家名氏神正八丈とらるる
此神社も作とてたてた感も
七つものくまらぬるるれは
宝くしゆん

神験光明まことなるるる
まことり者堂とたつ

夜とよ足跡をたむき
あふまるとるるのたつと
たつた

ふん法わの

飯立横の五尺よきとぬるる
むすもくた一雨よとら

と松のふたしとてたつた
いつつやたつた
さよ松と東ハ人てたつた
いさふたつた人たつた
あつた

ふハおくあるくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくく
月のも今ねらきくくくくくくくくく
橋をくくくくくくくくくくくくくく
さくくくくくくくくくくくくくくく
ふくくくくくくくくくくくくくくく
窟くくくくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくく

木啄もあくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくくくくく
るくくくくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくく
らくくくくくくくくくくくくくくく

教ゆえハ過る水の物と
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

石の毒らよらうこあらひう輝
槩のふくしむまらゆのこのこあらと
うさるうらみほるうさるの
折ハ甚道折の宜くあらうて田の畔
しゆらけ石の部守戸部某の
此折めとらやとさおぐよめあし
けりしのかうとこつこのまよとさ
しを今らけ折めらうらうら
まらりぢられ

田一折極しま去る柳うれ

夕涼うらうらうらうらうらうらうらうら
の閑よりりして折心をあらぬいと
都一と便ぬしとらじ中も
此開ハと園の一うらうて風操の人
心をこらむ秋風を身うらぬ
みなを付くしとまらぬの折れ

何れ也邦の糸のほが、
不の何れもして言ふとるる
はうすら古人冠をふ——衣襟と
み——木と信浦の筆も——
あれ——

邦の糸をかたし、
とく——て、
川をほくたし、

よ名城相馬三春の庄常陸
かたをさくひてふつ——
まをりしよ今ハ、
新つ——川の澤、
とふあをさくひて、
先ハ邦の國い、
同長途のく、
風系し、

断てくらくくくくくくくくく

嵐後のおがわくの田植

きりきりきりきりきりきり

張きととてくくくくくく

此方の清くは大ききるらん

ときめくし世をいよよ保を操じ

ろふたきししとて開く

あふくくくくく其詞

粟のいぬふ字ハ西の本とがて

西方はあきくはありといり

のこを扶くしはむも此

かすとうや

世の人乃足行ふふや軒の粟

等家あり家とをて五里行

の宿を離してあさくふと路あり

色くはありは多くくく

もやあきくくくく

ふうつとほはるしと人々よるる水
きしきし人々しはをる人々
さしきしとるあつさして目と
とのゆるしうりぬをねりたる
きしきし黒塚のまを一見し
福崎よさあつあつれハまのよりら松
の石をうつらてきよのほくさ
らとらほの小里よ石すまよたて
けり里の重アのまりてさぬら
昔ハせとのとよけしをけあ人の
まよよとあししてけんを誠信と
うきみてけ谷よつきあせハ石の
面トさようよしとらとさしあ
くさるしや

早甚とらまのくやあまのうけ
月の物のかしをきし流のと

とあるくあり依藤庄司う曰れん
たのしき條一とす身よる飯塚の里
弱野と云ふところらくありよねらと云
ふらわらるるは莊司の田舎也林
よ大手の伝ると人のたぬゆらよと
て洞と云ふ一みくころのちと
つ家の石碑をたす中も二人の
塚ふと云ふ一せんも也女うれと

うらくくさくらの世とせえらるお
ろと波をぬりり海邊の石碑
色なきさしあつすちと入して茶
をんハハと云ふ義經の太刀とま
らぬととせりけし付おとす

爰も太刀も五月よと云ふ
城

五月朔日のころ也と云ふ飯塚と云ふ
と温泉の川入り湯に入つて居ると云

おのふせし人 迷をまてあや
う、負をまてし 灯もみまらぬ
この火いけし人 痛むとよ
外よりあふ入て 雷鳴雨さ
降ておのふせし人 雲
とておのふせし人 眠
おのふせし人 消入
おのふせし人 消入

おのふせしの金使
業おのふせしの金使
まこといふこと
ととと 霧 旅 邊 止 の 行 脚 捨 身
無常の觀念 道路
の命うめとらふ力 柳
路 經 横 一 帶 一 行 住 道 の 大 本
戸をこけ 燈 摺 白 石 の 燈

是修の部に入まハ者中おまハ
の塚ハいつこのまゝと入ま
くこりみこた〜とゆらら
の里とこのまゝ修とまゝ修
の社〜との修今〜ありと
比の五月多〜といま
あ〜んれ〜とま〜船中
ま〜ま〜修〜し〜り
の折〜お〜り

是修ハいつこの月のめり
志法よら

茂隈のね〜ふ〜り
根ハ土除りニオ〜り
のま〜〜と〜と〜と
は修〜と〜は昔の〜
下り〜人〜と〜川

の橋杭よりせんをさるるのりさるる何
きはしやねハけしん後とさしん
はくめ付くあらハ体あるしハ極
継きとやしおさし今將子殿
のさるるさるるのりさるる
松のさるるさるる

武隈の松女と事とさるる極
さるるのりさるる

楊より松ハと事と之月越し
名取川を流して仙臺より入あやめ
物く口や流石をとりとめしてさるる
返るるすさるる一畫工かた集つとさるる
あや神心あら者とけとてさるる人
しとさるるこの者とさるるさるる
名とさるるを考ふとさるる
一日案内す宮城野の秋はあ

あつて秋のさうさうやう
玉田よと群つて一園ハらと
あつた也日暮とわぬねの枝より
入て空を木の下のさうさう
うく家あけきハるさうさう
こころごとハるみくれ業師を天神
の心強くとおつてさうさう
ね修治うさのあつて畫うさうさう

思得のほおつけとら草鞋豆
あつてハる風原のさうさう
うさうさうさうさう

あつたつたさうさうさうさう
あつて畫園のさうさうさうさう
あつてのあつたのさうさうさう
あつて今もさうさうさうさう
あつて園さうさうさうさう

燹碑

市川村多賀城ノ有

つゝの石少くハ高サ六尺餘横ニ丈計
此石を燹守リク、又字也也四維 国
界之致 聖と云々、此城神亀元
年按察使鎮守府將軍大野胡臣
東人之所里也天平宝字六年、參
議東海東山節度使同將軍
惠養朝臣猶修造而十二月朔日

と有 聖武皇帝の時より
むし、ハり、み、ま、の、松、や、り、く
流、は、よ、く、ハ、一、も、も、山、崩、川、落、て、は
け、く、を、さ、う、石、ハ、お、り、て、ま、よ、く、れ
た、ハ、考、て、ま、よ、く、く、り、れ、は、し、け、り
け、ま、あ、り、く、ハ、ま、た、く、く、く、あ、り、し、
の、ま、を、さ、う、ま、り、て、ま、よ、く、く、く、し、
燹の記念今歌あよ、古人の心

を問うり知の一徳ある今の
及し其旅の方とあるれこ
間とあるれこ也

くれり予回の山に伴のるを
末乃松とハハと云て末松と云
松のありく皆葉はくくしておを
うり一松とつゝある其の末は終
ハハのこゝと云て也一と云つ

はつたの渾よ入おのいれをいへ
ふかき御ふれて夕月更幽
舞ふ舞もらくも一舞のあま
きいしてまわりのあうくも
てうりもくもみくも心と云つた
いへ舞也其の目目は御一入
張毛もあうして奥とらりよ
かのうらう早あうもくも舞

もあまのひまひきくら細きうら
まの枝らうらうらうらうらとこ
すくよ色土の遺風とねまの
くしねねくしねねくしねね
のり神よ信國守再興と
て宮柱やくく彩椽くく
くく石の階大奴よまわり
若の玉くくくくくくくく
若の玉くくくくくくくく

果蓋土の坊より神霊あり
やうくくくくくくくく
くく貴くれ神ありくく
うねの戸らうの向く文治元年
くく奇進くくく五つくく
今月の常くくくくくく
改一渠ハ勇義忠孝の士也佳令
今よまのくくくくくく

渡人の道と勢を尋ねてさくし
くまのこころよとさくしとさくし
午よらうし船をとりて松崎のやま
其間二里除雄偉の御さく
持てあめりさくし松崎の枝葉
一のぬ風さくし凡河を西側を船す
東南より海をとりて江の中一里
湘江の湖をさくしゆきくぬのぬを

あつて歌の天を括めり
を渡り舟をとりてハニをさくし
三重の上をさくしたよちね右よつ
みらるるあり抱きあり愛をさくし
くまのこころよとさくしとさくし
改風さくし吹くハめくし屈曲をのり
をめりさくしとさくし其さくしとさくし
さくしとさくしとさくしとさくし
とさくしとさくしとさくしとさくし

神のむしー大とすまのふらわさ
うや造化の天上いつきの人々筆
きふらふし 幻とてふささ
雄流の後一地つてさく海をわら
流也 千と流 輝 師 ぶ 室 の 花
吹 浪 石 ころころ 将 ね の 4 行
世といふ人し 孫くさく 孫くさく
流 種 ね とも とも とも とも とも

菴 岡 一 位 一 一 一 一 一 一 一 一
さくし 月 海 ころころ ころころ ころころ
又あききい 江 上 一 行 一 行 一 行
おれハ 宗 とも とも とも とも とも
風 雲 の 中 一 行 一 行 一 行 一 行 一 行
あや 一 行 一 行 一 行 一 行 一 行 一 行

ね 時 一 行 一 行 一 行 一 行 一 行
二十四 一 行 一 行 一 行 一 行 一 行

平ハ... 暇... 時... 松... 感... 風... あり

十一日... 世の昔...

入... 禪... 七堂... 夢... 金... 土... 彼見... 十... 雛... 菟... 葛... 蕪... の...

とてわたりて路少き事にして
石の巻といふ瀨よかくりぬる
とらみて舟のりて金花と海と
見わたりて數百の廻船入に
ひ人及地をいづるに
煙をたきつて舟のりて
下よももれぬとちと
ころよちと人なり

小家より一舟をいづるに
みよぬたよとちと
尾ゆらの牧よの
かきつてみよとちと
まよとちと
一舟より平泉よ
余里より

三代の業耀一膳の中

大門の江ハ一里の間に在りて有る衛
ふ江ハ四野に在りて金鷄山の
形をみたり先も籠りあり其
水は川南部より流るる大河也
衣川ハ和泉の城をめぐりて
の下より大河に流入康衡より
江にハ衣の川を流りて南部に
をりて聖女堂をめぐりてあり

備、義臣、行て此城より

こりて功名一時の最とるる国政
まて山河ありて城春よりして草
まみありと置たりてありて
つてて川をまきりてあり

衣の川ハ衣の川

卯のふよ魚房みなり

高して再ありてありてあり

す煙堂ハ三將の像との〜
光堂ハ之休の櫃を納めとさる
佛を安置す七宝をめぐり〜
障の扉凡ゆるやまき金の櫃 案
雪より朽て既頽廢之虚力最
と成〜ことを四面新〜固て燕
を雲隠り 凡命と後物何年
の正念といはるり

五月旬の清の〜了や光堂

南ア道も〜〜サリて空の
里へ流るふさゆき〜の少影を
とて〜る〜の扉あり尿前の開
〜〜して出羽の〜〜
此路 旅人 傳〜る〜
開〜〜し〜
関を〜〜大とをのら〜

日鏡言々いれん封人の家々を
うたりし金々も水もこの風ぬれ
てうらみごとく中へ流るる

春風よめ尿すも花と

何れこのえもより出羽の山々
大らとけしてあつこうのうらさ
れはるる人の人をたてぬ
きうしきうしきうしきうし人を

おのれに完喜のる者及銀指
をよこしし櫻の杖と推方てふく
はよよききききききききき
うらむらむらむらむらむらむら
幸もいひいひいひいひいひい
りいりりりりりりりりりり
森とてててててててててて
下園ありありありありあり

雪を知るよつらぬらん心也
露の中踏ふく氷とわらひ
よ藤し肌よつらぬらん汗を流
しと露上の庄くおのの
葉のとつらぬらん心也
必不用のつらぬらん心也
まじつらぬらん心也
まじつらぬらん心也

心也

尾不澤しつらぬらん心也
ぬきつらぬらん心也
つらぬらん心也
つらぬらん心也
つらぬらん心也
つらぬらん心也
つらぬらん心也

つらぬらん心也

遠きよふいおつたのふみの

やめをききを得てしお影のふ

琴列する人ハ古代の千の

山形頗るくま石もさくらさよりの

意覺大師の同墓くしてお清

洞の地也一見すつこくし人

かまもくくし係りてお清の

お清てはし其同七羅の

日つちてさきす一林のたしお清

ましつとのまよふのちろ岩

と敷と重てふとくお清の

土石たてて昔清よ岩との

扉を閉ておのまらしお清

まらちちつと遠しお清

法界よお清とくしお清

洞よお清とくしお清

山の上川めんと大石田と、
日影を待たうと、
こぼれてこぼれぬ水のちりこぼれ
しきり角つあうのつとやうもや
やうようのあしして新たな
ほくよあまのうよよもみら
まゝへうらへしうけぬえとわり
うと一書をあつぬこのまの風流
うましくあれり

山の上川ハみらの一りちてと
を水ととすいこもあつぬこも
あうろく、
と流て果ハ酒田の海へ入た
雲ひ花その中へ散る下す
よ猪く、
白糸の流ハ青葉の流く

仙人堂岸より修てさくらさくら
さつてふあやう

五月廿五日つめて早一と云上門

六月三日羽黒山よりあきら園司た吉
とま者こといふて別の中代今人えり
園和の湯す南谷かふ後より
今一と憐愍の情こさやうと
あうと

甲申年坊々をわて誂諧具り

有難や雪とくちうす南谷

五日権設よ消當山同園能除
大師はいつまの代の人とまやを
とくちう延喜式より羽別里山の神
社と有書寫黒の字と里山と
ふとくちうや羽別黒山と申
て羽黒山とくちう出羽といふも

鳥の毛羽とて其國の青鳥と較すと
風土記より仔細なる月山湯殿
を合て三山とて當寺武江東
殿より属して天台止觀の月洞
くくく同形融通の法の灯をけ
るひて僧坊棟とてくく修験
行法を勵し一矣山靈地の縁
知人貴且多から繁栄長くし

めくを山とて謂ひし

八日月山のより本郷をあり
し引り實証し其をくく強力
とてのよらひれて雲霧と
氣の中より氷雪と踏てのり
中八里より日月行きの雲洞
よ入るとはやかれ身終るく
更上より露氷く日没て月照る

毎と浦の岸を枕として臥て
ゆくをたれり出でてはるはるきと
はるはる

谷の傍に銀流小瀑と云ふと其水の
飛流雲水と撰てはるはる潔浄
しし銀を打流月山と銘を切
てせし貴さるる彼龍泉の洞
を降と云ふ干将莫邪のむしと

そよ道よ塩鉄の瓶あはるるぬ
水とそれきりあはるる瓶あはるる
とりーやすあはるるとんくうらあ
梅のつらとすはるるあはるる
梅雪のりりしほして春をこころぬ
さよとあはるるあはるる
梅よさるるあはるる
信正のそよのえしとあはるる

たゞしうしてさるめさるせら中の
激ゆる者の法式として他言を
下を移さす仍して善くともいふ
坊しゆれとての國國の常上條と
とら源礼の句と終焉とす

清くやあめさ月の御さつと
雲の舞うまにあつて月あふ
信く見ぬほぬくよめさ終焉

ゆふとあふむゆめの洞とて
羽黒とて鶴の園の城とて
氏重行とて物のぬかあつむく
られて誰か一さるるた昔もけと
さるめ川あつてさつて源河の深
くさつて別名を玉とて源河の深
くさつて

らつて山吹浦とてさつて

暑き日は海へいそいでり流上り
江ふら陸の風をぬくもあつて
今氣はうらやまを貴湯田の湯
より東北のまらと砂礫を傳へ
ふいこころあつて其際十里見
やかきくは波風とぬを吹上
雨朦朧とくき海の山くく
周中く莫化く雨しよ奇せと

まじし雨風の晴色入新舟と雲
の影をく膝をいそいでり
と新き船天候霽く柳の玉
やうきさし出り行く氣流くま
うらやま能固きくまをいそ
らまぬぬの流とあつていそ
岸よふまをいそぬくまをいそ
よまぬぬの流とあつていそ

の行人をものこし江上より山陵
 けり神切后宮の岸墓をめぐり
 を干満殊るといふは、まよふかき
 ありしやふしとてさういふも
 ちよよやきよのみまよふにたして
 くらとて捲く風を東一服のまよ
 おきて南へも海天をひらき
 且ほくわくし江のあり西へはやく

の舟路をめぐり東へはを築て
 舟田よりくわく海北より
 えくはみち入るをひらきと
 え江の縦横一里をめぐり舟を
 うらみて又異なるかた後へは
 かく象深はくむらむら
 けり少くみとくそそ地勢を
 をるわくわくし

象深や雨くぬ絶ゆるあふ

改神や勢はさむくし海原

みゆれ

象字や料理にくし神象

まき

このみのでん

象の象や戸移をまゐりて

岩より唯鳩の象ありて

まき

象くみ象ありてやみこの象

仙田の象はりて重しに陸田の

重くらくし建ての象ありて

やうめりし加賀の府をくし

とや嵐の園をくしやみくし

の地くしやりて改て改て

みゆれりの園を改て改て

暑温の象くし神くしや

みゆれりの改て改て改て

子月也古日に寧のあつては

荒海や佐後一とちよ夫この

今日八款一とちよ子とちよ大り

船も一とちよ北園一の羅石を

船つつれちねと捲引とちよ

船つらよ一問傍て面むとちよ

あつて廿のあつて入斗とちよ

手たつとちよのあつて使て

お徳とちよとよけ八款ほのあつて

管とちよのあつて馬一伊勢のあつて

下とちよしは園とちよのあつて

ちとちよ右つとちよとちよとちよ

とちよとちよとちよとちよとちよ

のあつてらけとちよとちよとちよ

あつてのこのせとちよとちよとちよ

とちよとちよとちよとちよのあつて

うよつこま〜とぬきとこ〜
る痛入りあり〜とぬきとこ〜
むら〜りきとぬきとこ〜
うさあ〜りさぬきとこ〜
はね〜りさぬきとこ〜
ひさ〜ん衣の上のりきとこ〜
か〜とぬきとこ〜
とぬきとこ〜

うよつこま〜とぬきとこ〜
る痛入りあり〜とぬきとこ〜
むら〜りきとぬきとこ〜
うさあ〜りさぬきとこ〜
はね〜りさぬきとこ〜
ひさ〜ん衣の上のりきとこ〜
か〜とぬきとこ〜
とぬきとこ〜

け川をわたりて那古と云ふ浦に
出立の者には春の風もあつても
初秋の風もあつても、とて
人よなれとせよ五里いづ
はひしむふかのうはひしむ
雲のせむかふとくすくす水えき
の一粒のちりよりのあつても
とくすくすくすくすのうはひしむ

とせの香や

入右もさきゆめ

舟のあつちりちりちりちりちり
今頃ハ七月中の五日しに
大はあつちりちりちりちりちり
とくすくすくすくすくすくす
つ笑と云りのハはひしむ
ふあつちりちりちりちりちり
しちりちりちりちりちりちり

具見道場を信す

懐も物け家後あるは時感

あつちのつらきつらきつらき

秋涼しく母もむけや血茄子

途中 喰

何くとも日ハ難句もあまの風

あつちのつらきつらきつらき

とらちのつらきつらきつらき

此石太田の神一社一請まらぬ

甲綿の切ありはむるほはり

属と一時義朝とよりあつち

とやつらし平士のあつち

月庇より吹ふつらきつらき

つらきのつらきの金をとらちのあつち

つらきのつらきのつらきつらきの

本堂義仲のつらきつらきつらき

しこめしれはくしー板石の跡を
うけをーヤーたさのあこめ
縁紀くーみくしり

むんおら甲のら乃きりくす
ふ中の過り水くしりりく白根
く嶽はくしーみるくしーしめいむ
先のら修しー観音堂ありふ
ふのはきこくすくすの唯れ

とちりことかひてはふ大並大懸
の像と安堂しーかひて那谷
とふ年のしーくや那智谷組の
と字をまわしり行しーしりちあ
石くさくしー古松極くくくく
草かまのの小出まきりのしー
きりくしーみねの土紀し

石ふ乃石ありしー秋の風

漁泉ノ洛す其切有可^下と
と

山中や菊ハきかぬは白

つとてはあハ久^下と物と

いさこぬ重くし^下又誹諧と

ぬと洛の貞室^下のむし

さあし^下あり^下以風報^下と

め^下れて洛^下の^下長^下の^下人

とみ^下てせ^下と^下現^下の

は^下一村^下判^下の^下相^下と

と今^下又^下し^下一^下條^下と

魯^下良^下ハ^下腹^下と^下物^下と

因^下も^下終^下と^下お^下と^下あり^下あ^下た

先^下と^下て^下り^下と

い^下く^下て^下き^下つ^下れ^下休^下と^下と^下物^下の^下系^下

と^下う^下を^下し^下り^下の^下ま^下と

おりのくま子復鬼のかけ紙
千重のくま子

今日よのちきり清くはるる

大聖おの城介全昌寺より

きりきりたるは 杉加賀の地

きりきりたるは 杉加賀の地

淡雪お風さや

とおよ一巻の信よ

昔もお風をとやま

外もお風のや

あつすむさ

食堂より入る

了し心あ

下るると

いゝ階の

おるる中

土庭掃て歩もやちこしを竹
こりたへぬさきしりてさき鞋子
うしきかたに細ふかたを給
の入にをみし持しとけ
御の程をさるる
みもりゆれしはつとととと
口をきれしはつととと
此一首しり物まふあり

一辨をわりのハ毎日の物
ま

丸田天龍寺の古者たち
つらつらとつらつら又今更のつら
とらつらとつらつらとつらつら
けつらつらとつらつらとつらつら
風まふとつらつらとつらつら
おまふとつらつらとつらつら

すゆ今統あしとみし

おかきる引はく余は成

五十一了らよ入て永平るをれ

す道之強師の由幸や邦様

ふ里を遊てうらうら

池をのくくわの貴さく

あとも

福井ハニ里けあかへる版

きくあてあうきう水の

路くくくくくくくく

あき、流士さくくくく

江ノくくくくくくく

十とくくくくくくく

くくくくくくくくく

らなれといきくくく

くくくくくくくくく

引のしやののちあゝくまを
夢らふのこゝろをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし

うらふまのこゝろをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし
あしとくしをくし
はうしとくしをくし

うく水て比那々々々々々々々々々
あまむつの橋とわさつてあま
の世也、物々々々々々々々々々
の甲ととととととととととと
張ん極り城うつらやさ
うお屋を上げてすうのた
あれ一うの津一宿と
りともりの夜目おるう

あまのあしうあまへへ
とつて越洛の多むれり長
の屋崎うさか一とととと
うほすあしうあまへの神
うおあまう仲哀天皇の御
廟也社頭神とていし松の本
の洞し月ありあ入きうま
の白砂窟をまううう

往昔おつり二世の上人大邪
教起のまじりたりしころに
を刈土石をまじりし泥滓と
うはくそりし糸信は玉の如
きし古例今よきし神前
しちり砂をまじりしわらを
おりの砂おとすはまじりし
まじりし

月信一遊りののり
すみの亭さのり
西

名月お団日おまじり
十六りや
小貝らりりと種のは
まじり海よ七里あり天
そまりの破

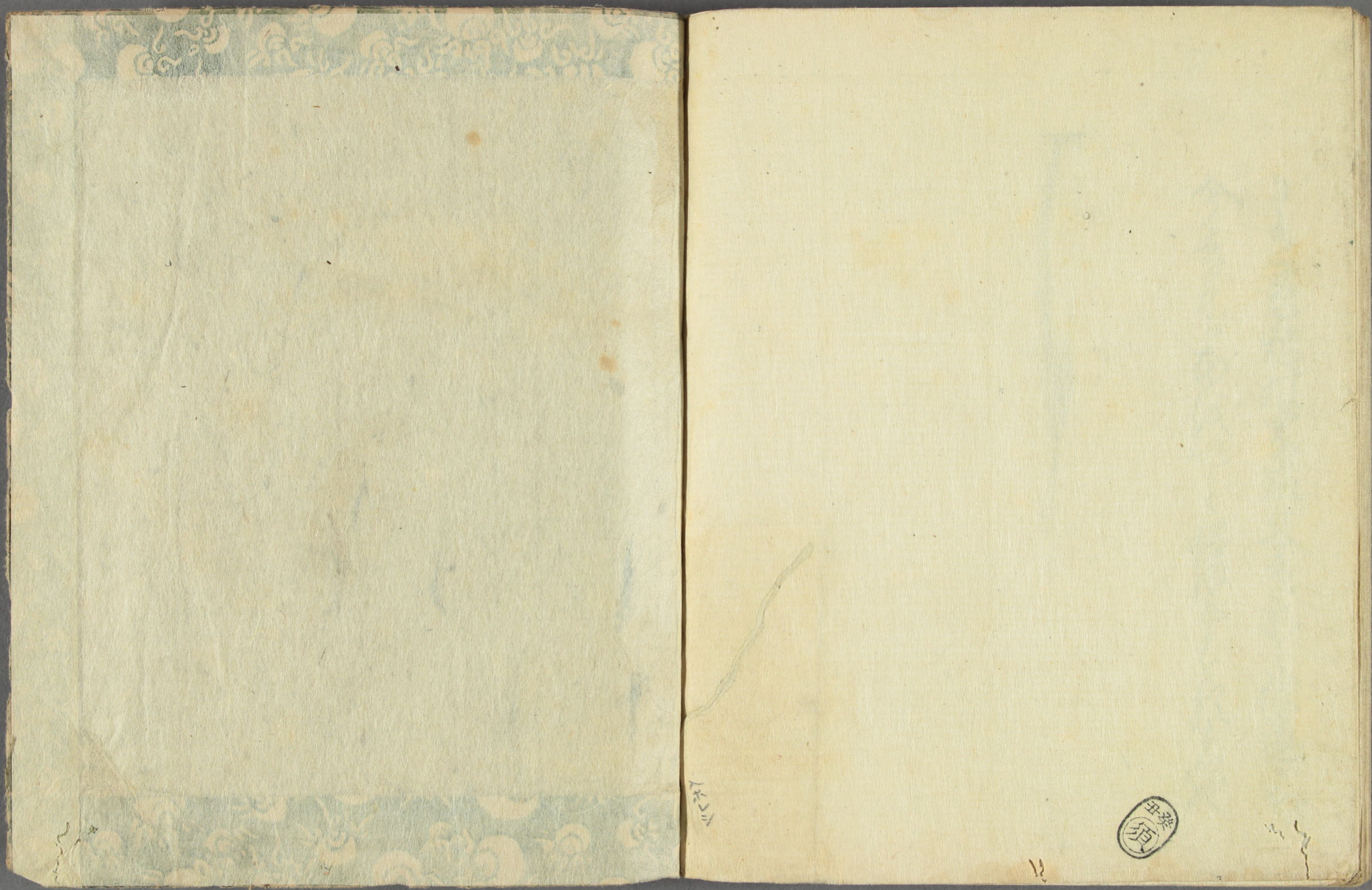
し如行々家々入集るる事
門子刑口父子共おとさ
き人々日々相とさるるて候
せぬの事あつては且
促ひ思らるる旅のおと
とくさるるやささるるも月
六の事おれく伊勢の辻宮
おとくさるるやささるるも月

吟の
ゆきみ
わたりり
わたりり

此一書ハ芭蕉翁奥羽乃絶然ノあり
素庵ノ筆也書ハ縦五寸五歩横四
七歩紙の重ハ十二首尾小自紙ノ加
外ノ素紙ノ故ニ今畧紙成紙ノ表
紙紫乃系亦歌ハ金の表袖らし
る白地よわくのやうなと自筆ノ書
て通身一色不遷化の後門ハ去来
行ふこと又書蹟の書ハ人智故
行

今昔集の巻紙のていごうの相違





須
五

